

ニューイヤール・カード

中村 龍介

小学校高学年のとき、写真好きの父から中古のカメラを払い下げてもらった。「セミニノルタP」という機種で、カメラの蓋を開けると、スプリングにより蛇腹を自動的に引き出す方式のものだ。

それまでは、蓋を開けて手で蛇腹を引き出すものしかなかった。「写真機」を「カメラ」と呼ぶようになったのは、このスプリング・カメラが世に出たからではなかったかと思う。

フィルムも、従来の一枚ずつ挿入する乾板型からロール状に巻いたブローニー版に替わった。それでも、十二枚撮りまでしかなかったと記憶する。

中学二年生の頃だったか、普及し始めた35mmカメラの「ロード」という機種を買ってもらった。35mmとは、使用するフィルムのサイズで、横幅の長さを指す。ブローニー版では60mmだったものが、35mmとコンパクトになったことで、一本のフィルムで撮影できる枚数も三十六枚と大幅に増えた。

高校に入学すると直ぐに写真部に入り、愛機のロードを手に、街でスナップ写真を撮ることを始めた。同時に、暗室での作業も先輩たちからの指導を受けて一通りマスターした。

暗室作業はDPEと呼ばれるが、D (Development) は「現像」、P (Print) は「焼き付け」、E (Enlargement) は「引伸ばし」で、当時、町の写真屋さんの店先には殆んど例外なく「DPE」の看板が架かっていた。

DPEをマスターすると、色々なテクニクを使い、写真屋さんに頼むのとは一味違った作品を作るようになった。

次に、取り組んだのが写真年賀状。動物園で撮影した干支の動物と自分の写真を画用紙に貼り付け、空白にマジックで挨拶などを書く。それを被写体にして複写し、大きめの印画紙に焼き付け、カッターで葉書サイズに切断する。この切断作業はかなり面倒で、切断のミスでオシヤカになることも度々あったが、後に富士フィルムから葉書大の印画紙「ポストカード」なるものが売り出され、切断作業はなくなる。

また、複写するためには、35mmカメラは不向きで、どうしても一眼レフが必要。そこで、また父にせがんで国産初の「ミランダ」という一眼レフカメラを買ってもらった。父も、一人息子に写真道楽の火を

点けた手前もあつてか、写真用具の購入については、日頃の厳格さは感じられなかった。

斯くして、高校二年、即ち一九五六年の年末に私製の写真年賀状が知人、友人宛てに投函された。年が明けると大きな反響があつた。

「楽しい賀状だ」、「お母さんが褒めていた」、「来年も、また欲しい」等々…。

これに意を強くした私の写真病はますます深みに入り込み、膏盲の近くまで達したようだ。大学受験の志望校に「日大芸術学部写真科」と申告したことを思い出す。さすがに、これは父の大反対で陽の目を見なかった（この父の反対には今更ながら感謝しているが…）。

写真年賀状は、その後も途絶えることなく、三度の例外（父、母、妻の喪中年）を除いて、今も続いている。

娘たちが成長すると、絵の得意な長女に干支のデザインをお願いし、印刷も業者に発注するので私の仕事量はずっと少なくなる。

会社時代には、外国の取引先の要人にもクリスマスカードとともに写真年賀状を送るようになったところ、多くの要人から「ニューイヤールカードのナカムラ」との異名を頂戴し、仕事の面でも大いに貢献することができた。

さて、写真年賀状を始めてからももうすぐ六十年。周囲では年賀状を止める友人、知人が増えてきた。私も今年は後期高齢者。二百五十枚ほどの年賀状だが、年末の多忙な時季に限られた時間で宛名と短信を書くのもかなりの苦痛だ。そろそろ止めることも視野に入りたいが、遠く、ドイツやトルコの地でも私のニューイヤールカードを楽しみにしている人が居るかと思うと、簡単に止めるわけにはいかない。

これからは万事、老いとの闘い。果たして、後何年続くだろうか。

【二〇一五年七月記 原稿用紙五枚 課題「カード」】



1992年（申年）写真年賀状（長女デザイン）

→
セ
ミ
ミ
ノ
ル
タ
P



→
ロ
ー
ド



→
ミ
ラ
ン
ダ

